

国民文化創造のための試み

— 19 世紀から 20 世紀初頭のチリ —

中 島 さやか

独立した国家は、政府などの制度を必要とするだけでなく、独自の産業・技術や歴史・文化的アイデンティティーなど、様々な要素を求めるようになる。

国家や地域のアイデンティティーの源の一つとなり得る芸術文化は多くの場合、自然発生したものが歴史を通じて時の権力者や文化産業などに支えられ発展してきたものだが、歴史が浅く文化産業の基盤が弱い小規模な国などでは、自国の文化と呼べる明確な対象を見つけることができず、政治家や知識人などが制度を作り意図的に発達させようとすることもある。

本稿ではチリの例を取り上げ、19 世紀の独立後⁽¹⁾から約 1 世紀の間、知識人や芸術家などが、チリの文化やチリ人による芸術文化を保護・育成するために行った試み、そして芸術文化の創造に影響したチリの一般的な文化的状況について、19 世紀と 20 世紀の初頭の二つの時代に分けて簡潔に記述・分析する⁽²⁾。

19 世紀の主な試みと文化的状況

チリにおける芸術文化の歴史については、リアル・アカデミア・デ・サン・ルイス (la Real Academia de San Luis)⁽³⁾の例に見られるように 18 世紀まで遡って記述・分析することもあるが、独立以降に起源を求めるのが一般的である。

国家としてのアイデンティティーがまだ広く一般大衆には普及していなかったこの時代についてのチリの芸術文化に関連する記録や先行研究は少ないが、最も顕著な例としてまず、アンドレス・ベリヨ (Andrés Bello) らが中心になって 1842 年に設立されたチリ大学があげられる。ベリヨは国の文化を創造する必要性を強く意識しており、ナショナルアイデンティティーに基づいた国家の建設を大学を通じて行おうとした。彼のチリ大学設立の背景にはヨーロッパの模倣でない、チリ固有の文化を大学を通じて作ろうという理念があったが、実際にはすぐには実を結ぶことはなかった⁽⁴⁾。

チリでは 1840 年代から 50 年代にかけて芸術アカデミー (la Academia de Bellas Artes: 1848)、国立音楽学校 (el Conservatorio Nacional de Música: 1850)、音楽高等アカデミー (la Academia Superior de Música: 1852) など、文化・芸術に関する学校が複数設立された。クラシック音楽や美術の分野に携わる人材を自国で育成しようとする試みであったが、いずれの学校も外国人を学長に迎えており⁽⁵⁾、教師も外国人が中心で外国からの文化を直接取り入れていた様子が伺える。

チリのクラシック音楽の歴史について研究を行ったメリノによると、1855 年まではチリの作曲家や音楽の教師達はほとんど外国人であった。その傾向に変化が見られるのは 1860 年代に入ってか

らである⁽⁶⁾。外国人に占められていたクラシック音楽の分野にチリ人の音楽家や作曲家を送り出すことができるようになったのは国立音楽学校設立後15年以上が経過した後であったことになる。

作家で芸術家でもあり、チリの芸術文化の歴史に詳しいモンテシノスは、19世紀を通じて合唱や教会音楽、そして国立音楽学校の音楽教育などによってチリ国内で音楽活動が盛んになっていったとしている⁽⁷⁾。

このように、クラシック音楽はチリでは比較的早くから発展を始めた分野といえるが、メリノによると、それでも19世紀を通じてチリの音楽家達の活動の場は個人のサロンが中心で、その傾向は20世紀に入ってもしばらく続いていた⁽⁸⁾。学校は設立されたが、自国の音楽家を育成し、自国の音楽文化を創造・普及させることを可能にする安定した制度といえるにはまだ遠かった様子を伺うことができる。

今日でもチリの重要な文化的拠点の一つであり、首都サンチアゴのハイカルチャーの象徴でもあるサンチアゴ市立劇場（Teatro Municipal de Santiago）は1857年に開場している。しかし、演劇の歴史を研究したオクセニウスによると当時の活動内容は主に国際的に知られたオペラやサルスエラ、古典演劇、バレエなどの芸術家や団体を外国から招いて富裕な階層の人々に見せることであり、チリ人による文化の「創造」は行われていなかった⁽⁹⁾。また、オクセニウスはもう少し大衆的なもの、例えば中産階級を対象にした演劇についても、19世紀はペルーやアルゼンチンなど近隣諸国の劇団がチリに来て公演していたとしている⁽¹⁰⁾。

チリ大学とその芸術文化の歴史について記したラングトン・クラークはダンスの分野でも制度化や創造の試みはあったが、教育もプロフェッショナルなレベルには至らず、成果が出るのは1940

年代に入ってからであったとしている⁽¹¹⁾。

他にも、19世紀の終わりにチリ大学で芸術学部を作ろうとする動きがあったとの記録が残されているが実現したのは1929年になってからであった⁽¹²⁾。

以上紹介したように、19世紀のチリでは自国の芸術文化を育成するための様々な試みが行われた。しかし、クラシック音楽などのごく一部の分野を除いて実際に制度が作られ、安定した発展への道を辿った分野はなく、また、クラシックの分野に関しても芸術家の活動の場は個人のサロンが中心で、文化の創造につながる安定した制度が作られたとは言えなかった。

一般的な傾向として19世紀のチリの芸術文化の分野では外国人の影響力が強く、また外国文化の消費が中心で、自国の文化創造については初期的な段階にあったといえる。

また、この時代のチリでは「文化」の意味が、狭義で使われる傾向にあった。文献に記録が残るような文化創造の試みを行っているのはエリート層の知識人が中心で、その試みの内容もヨーロッパ文化の影響が強いクラシック音楽や西洋美術などの分野が中心であった。

20世紀初頭、1910年代までの試み

20世紀初頭に入ると大学でフォルクローレが研究対象になり、情報を集めて保存しようとする動きが出てくる⁽¹³⁾など、国の「文化」の概念に広がりが見られるようになる。

この時代、チリ大学では芸術館装飾芸術学校（la Escuela de Artes Decorativas: 1907）（el Palacio de Bellas Artes: 1908）、芸術協議会（el Consejo Superior de Bellas Artes: 1910）⁽¹⁴⁾などが設立され、また、演劇の分野でもチリ人が自

分達で劇団を作るようになる⁽¹⁵⁾など新たな試みが行われるようになった。

また、1914年のパナマ運河開設や第一次世界大戦などの世界的な出来事の影響で海外のアーティストがチリに長期滞在し、チリの文化の発展に影響を与えるようになったり、クラシック音楽の分野でも自国の音楽家の中にプロフェッショナルなレベルの作曲が行える人材が出てくる⁽¹⁷⁾など、20世紀初頭から1910年代にかけて、チリの文化的様相はかなり変化してくる。

1910年代に入るとチリの文化を保護・育成しようと、芸術家側からの体系的な働きかけも行われるようになった。例えば、1915年にはチリ劇作家協会（La Sociedad de Autores Teatrales de Chile）⁽¹⁸⁾が、クラシック音楽の分野では1917年にはバッハ協会（La Sociedad Bach）⁽¹⁹⁾が設立されている。

チリ劇作家協会は国内の演劇の保護し演劇活動を奨励する団体であり、国内の作家の作品を紹介する劇団を作るなどの活動を行った⁽²⁰⁾。外交官で外務省の文化顧問を務めたガンボア・セラッシ（Gamboa Serazzi）によると、この団体が設立される以前は、劇作家らが個人的に活動を行っているだけの状態で、多くの作品や活動が記録も残らないままとなっていたが、設立後は協会の援助を受けた劇団を通してプロの演劇人が育つなどの効果があった⁽²¹⁾。

バッハ協会は、後にチリの芸術文化の制度化と発展に大きく寄与することになる音楽家、ドミンゴ・サンタ・クルス（Domingo Santa Cruz）が中心となって設立された団体だった。当初、この団体の主な活動はコーラスのリサイタルを行うなど限られたものであったが、1920年代からは国立音楽学校の改革を行ったり、チリ人を中心メンバーとするオーケストラなど音楽グループを設立

したり、小中学校に音楽教育を導入するなど、幅広い活動を行う重要な機関に発展した⁽²²⁾。

以上のように、20世紀に入るとチリの文化的様相は変化し、自国で文化を保護・育成するための試みが本格的に行われるようになってくる。

おわりに

ここでは、19世紀に独立し、建国されたチリにおいて、知識人や芸術家らが一世紀にわたって自国で芸術文化を創造するために行ってきた試みの具体例を紹介した。限られた記録しか残っていないので、多くの例に触れることはできなかったが全体的な傾向をつかむことはできたのではないだろうか。

19世紀は外国文化の消費が中心で、文化の創造に携わる人々も外国人が中心であったが、限られた分野から少しずつ自国の芸術家が育っていき、20世紀に入ると国内の芸術文化を保護・育成するための試みが本格化していく。しかし、そこに至るまでには独立後から既に一世紀が経過しており、独立後のチリにおいて、自国の芸術文化を保護し、創造することが容易ではなかったことを知ることができる。

チリではこの後1940年代に一つの芸術文化の最盛期と呼ばれる時代を迎える。そこには本稿で紹介できなかった1920年代終わりからの芸術文化の制度化の試みが大きく影響するが、ここで紹介した試みの一部ものちに40年代の最盛期を支える基盤となった1920年代以降の芸術文化制度化のプロセスに吸収されていくことになる。

注

- (1) チリの独立の年については歴史家によって見解が分かれることがあるが、本稿ではオイギンスが

- チリの独立を宣言した1818年を独立の年とみなした。
- (2) ここで紹介する「芸術分野」の主な対象は一定の設備や投資が必要なもので先行研究や参考資料が見つかったもの限定した。具体的にはダンス、バレエ、クラシック音楽、演劇など。
- (3) 例えば、Arthur Andersen Langton Clarkeはチリにおける芸術の歴史の起源をイタリア人の芸術家であるMartino De Petriがレアル・アカデミア・デ・サン・ルイスで行ったデッサンの授業に遡って言及している。Langton Clarke, Anderson, Arthur, *Universidad de Chile 1999*, Universidad de Chile, Santiago de Chile, 1999, p. 111 参照。
- (4) 中島さやか「ラテンアメリカの大学論 大学と国家・社会・ナショナルアイデンティティーの視点から——1930年代までのチリのケースを中心に——」『国際交流研究』第7号、フェリス女学院大学、2005年、pp. 145-149 参照。
- (5) 国立音楽学校と音楽高等アカデミーについてはMerino, Luis, “La creación musical de arte en el Chile independiente”, *Panorama de la Cultura Chilena*, CESOC Ediciones, Santiago de Chile, 1994, p. 110 参照。芸術アカデミーの初代学長はイタリア人のAlessandro Ciccarelliであり、2代目、3代目も外国人であった。
- (6) Merino, Luis, “La creación musical de arte en el Chile independiente”, *Panorama de la Cultura Chilena*, CESOC Ediciones, Santiago de Chile, 1994, pp. 108-110 参照。
- (7) Montecinos, Yolanda, “Historia del Ballet en Chile”, *Panorama de la Cultura Chilena*, Fernando Gamboa Serazzi, CESOC Ediciones, Santiago de Chile, 1994, pp. 166-167 参照。
- (8) Merino, Luis, op. cit., pp. 117-119 参照。
- (9) Ochsenius, Carlos, *Teatros universitarios de Santiago: 1940-1973*, CENECA, Santiago de Chile, 1982, p. 2 参照。
- (10) Ochsenius, Carlos, op. cit.
- (11) Anderson, Arthur, Langton Clarke, op. cit., p. 106.
- (12) 当時の学長であったDiego Barros Aranaが提案。Lausic Arratia, Mariana, *Historia de Ballet en Chile*, Tesis en la Pontificia Universidad Católica de Chile, Santiago de Chile, 1996, p. 22 参照。
- (13) Catalán, C., Guilisasti, R. y Munizaga, G., *Transformaciones del sistema cultural chileno entre 1920-1973*, CENECA, Santiago de Chile, 1987, p. 14.
- (14) Santa Cruz, Domingo, “Medio siglo de vida universitaria: 1900-1950 en torno al Rectorado de don Juvenal Hernández”, *Cuadernos de la Universidad de Chile n. 1*, Santiago de Chile, 1982, p. 17.
- (15) 最初はチリ人が外国の劇団に脇役として参加するようになり、のちにチリ人自身が劇団を作り、チリ人の作品を上演するようになった。Ochsenius, Carlos, op. cit., p. 2 参照。
- (16) Ochsenius, Carlos, op. cit., p. 3 など参照
- (17) Merino, Luis, op. cit., p. 116 参照。
- (18) Cánepa Guzmán, Mario, *Historia de Teatro Chileno*, Editorial Universidad Técnica del Estado, Santiago de Chile, 1974, p. 175.
- (19) Merino, Luis, op. cit., p. 119 参照。
- (20) Ochsenius, Carlos, op. cit., p. 3.
- (21) Gamboa Serazzi, Fernando, “El Teatro Chileno”, *Panorama de la Cultura Chilena*, CESOC Ediciones, 1994, Santiago de Chile, pp. 42-43 参照。
- (22) Merino, Luis, op. cit., p. 120 参照。

参考文献

- Cánepa Guzmán, Mario, *Historia de Teatro Chileno*, Editorial Universidad Técnica del Estado, Santiago de Chile, 1974.
- Catalán, C., Guilisasti, R. y Munizaga, G., *Transformaciones del sistema cultural chileno entre 1920-1973*, CENECA, Santiago de Chile, 1987.
- Gamboa Serazzi, Fernando, “El Teatro Chileno”, *Panorama de la Cultura Chilena*, CESOC Ediciones, Santiago de Chile, 1994, pp. 41-50.
- Lausic Arratia, Mariana, *Historia de Ballet en Chile*, Tesis en la Pontificia Universidad Católica de Chile, Santiago de Chile, 1996.
- Langton Clarke, Anderson, Arthur, *Universidad de Chile 1999*, Universidad de Chile, Santiago de Chile, 1999.
- Merino, Luis, “La creación musical de arte en el Chile independiente”, *Panorama de la Cultura Chilena*, CESOC Ediciones, Santiago de Chile, 1994, pp. 105-141.
- Montecinos, Yolanda, “Historia del Ballet en Chile”, *Panorama de la Cultura Chilena*, CESOC

Ediciones, Santiago de Chile, 1994, pp. 155-182.
Ochsenius, Carlos, *Teatros universitarios de Santiago: 1940-1973*, CENECA, Santiago de Chile, 1982.
Santa Cruz, Domingo, "Medio siglo de vida universitaria: 1900-1950 en torno al Rectorado de don Juvenal Hernández", *Cuadernos de la Univer-*

sidad de Chile n. 1, Santiago de Chile, 1982. pp. 9-56.
中島さやか「ラテンアメリカの大学論 大学と国家・社会・ナショナルアイデンティティの視点から — 1930年代までのチリのケースを中心に —」『国際交流研究』第7号, フェリス女学院大学, 2005年, pp.139-163.